

図書館来館者数の増加を目的としたポイントカードの導入

依光 朋子¹⁾, 山崎 裕司^{1,2)}, 萩野 智美¹⁾
酒井 寿美²⁾, 平賀 康嗣²⁾, 稲田 勤³⁾, 川上 佳久⁴⁾, 西野 愛⁴⁾

平成24年度 高知リハビリテーション学院紀要（平成25年3月）第14巻 別刷

-
- 1) 高知リハビリテーション学院図書館
 - 2) 高知リハビリテーション学院理学療法学科
 - 3) 高知リハビリテーション学院言語療法学科
 - 4) 高知リハビリテーション学院作業療法学科

報告

図書館来館者数の増加を目的としたポイントカードの導入

依光 朋子¹⁾, 山崎 裕司^{1,2)}, 萩野 智美¹⁾
 酒井 寿美²⁾, 平賀 康嗣²⁾, 稲田 勤³⁾, 川上 佳久⁴⁾, 西野 愛⁴⁾

Tomoko Yorimitsu¹⁾, Hiroshi Yamasaki^{1,2)}, Tomomi Hagino¹⁾
 Sumi Sakai²⁾, Yasushi Hiraga²⁾, Tsutomu Inada³⁾, Yoshihisa Kawakami⁴⁾, Ai Nishino⁴⁾

要 旨

図書館利用者数，貸出冊数を増加させる目的でポイントカードを導入し，その効果について検討した。

対象は平成22年度本学院在学学生520名，平成23年度本学院在学学生523名である。

平成23年10月から，図書館利用者にポイントカードを配布した。ポイントは，図書の貸出機会，返却機会，国家試験問題への挑戦について2ポイント，文献相互貸借申込について6ポイントが付与された。合計10ポイントで，借用可能な図書数を1冊増加，あるいは漫画本3冊の貸出，さらに30ポイントで，漫画本10冊の貸出という特典を付与した。平成23年10月から平成24年2月までの期間における来館者数，貸出図書冊数を平成22年度の同時期と比較した。

平成22年度と23年度を比較すると，来館者数には，11月13.1%，12月11.4%，1月11.8%，2月39.5%の有意な増加を認めた($p<0.05$)。しかし，貸出冊数には，有意な変化を認めなかった。

ポイントカードの導入は，利用者数を増加させるうえで有効に機能したものと考えられた。

キーワード：図書館，行動分析学，ポイントカード

【はじめに】

全国大学生生活共同組合連合会「学生の消費生活に関する実態調査」によれば1985年から2008年にかけて大学生の読書時間は50分から29分に短縮し，読書時間ゼロの大学生が約4割にのぼっている。理学療法士，作業療法士，言語聴覚士の養成校である本学院でも，図書館の貸出利用者数は平成20年度7731人，21年度7717人，22年度7347人と年々減少している。図書館の利用を促進することは，学習の質を向上させるうえで重要な要件であり，図書館として取り組

む意義がある。

Mayers ら¹⁾は，図書館利用者の本を書架に戻す行動を増加させることを目的として，行動分析学を用いた介入を行った。介入では，利用者が本を適切な位置に返却した場合，トークンが付与された。一定以上のトークンがたまった場合，映画チケット，ハンバーガー，コピー機の使用などと交換できた。その結果，張り紙などによる注意喚起を行っていたベースライン期に比較して，介入期では棚に戻されていない本の冊数が有意に減少した。そして，介入

1) 高知リハビリテーション学院図書館

The Library of Kochi Rehabilitation Institute

2) 高知リハビリテーション学院理学療法学科

Department of Physical Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

3) 高知リハビリテーション学院言語療法学科

Department of Speech, Language and Hearing Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

4) 高知リハビリテーション学院作業療法学科

Department of Occupational Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

終了11か月の時点でもその効果は持続していた。

そこで今回、図書館利用者数、貸出冊数を増加させる目的で、強化刺激としてポイントカードを導入し、その効果について検討した。

【方 法】

対象は平成22年度本学院在学学生520名、平成23年度本学院在学学生523名である。

平成23年10月から、図書館利用者にポイントカードを配布した（図1）。その際、ポイントカードのシステムについて説明を行った。ポイントは、以下のようなルールで付与した。図書の貸出機会、返却機会、国家試験問題への挑戦（図2）、それぞれについて2ポイント、文献相互貸借申込について6ポイントである。ポイントカードは利用者管理とした。そして、合計10ポイントで、借用可能な図書数を1冊増加、あるいは漫画本3冊の貸出、さらに30ポイントで、漫画本10冊の貸出という特典を準備した（漫画本の蔵書数は713冊、通常は借りることができない）。そして、平成23年10月から平成24年2月までの期間における来館者数、貸出図書冊数を平成22年度の同時期と比較した。来館者数は、図書館入口に設置されたカウンターを利用者が来館時に押すことによって記録した（図3）。閉館日数は、平成22年度96日、23年度97日であった。

統計的手法としては、月毎にマンホイットニーのU検定を用いて来館者数、貸出冊数を比較した。有意水準は危険率5%未満とした。



図1. ポイントカード

ポイント獲得のルールは、貸出2ポイント、返却2ポイント、国家試験問題2ポイント、相互貸借申込6ポイント。

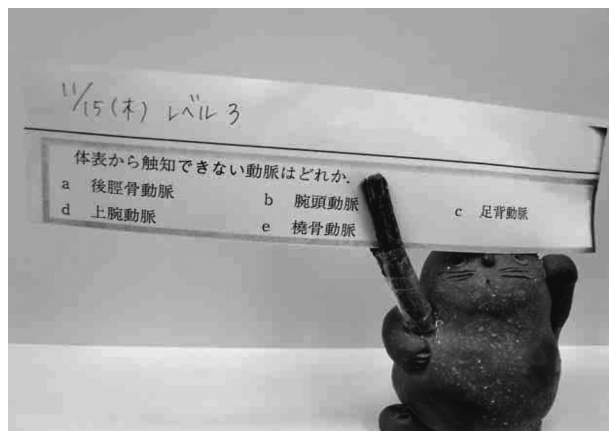


図2. 国家試験問題一問一答

一日一問出題。正解が5つたまると粗品がもらえる。



図3. 来館者数の調査方法

入口にカウンターを設置。来館する度に所属学科のカウンターを押す。閉館時に集計。

【結 果】

平成22年度の利用人数は、10月148人/日、11月178人/日、12月159人/日、1月148人/日、2月158人/日であった。平成23年度は、10月148人/日、11月209人/日、12月187人/日、1月175人/日、2月199人/日であった（図4）。平成22年度と23年度を比較すると、11月13.1%、12月11.4%、1月11.8%、2月39.5%の有意な増加を認めた($p < 0.05$)。

平成22年度の貸出冊数は、10月1261冊、11月1845冊、12月1320冊、1月1199冊、2月1247冊であった。平成23年度は、10月1240冊、11月1909冊、12月1282冊、1月1174冊、2月1360冊であった。平成22年度と23年度を比較すると、貸出冊数には、有意な変化を認めなかった。

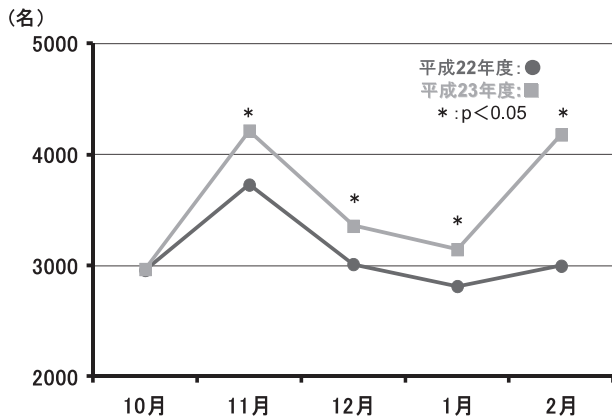


図4. 来館者数の推移

平成22年度と23年度を比較すると、11月13.1%、12月11.4%、1月11.8%、2月39.5%の有意な増加を認めた(p<0.05)。

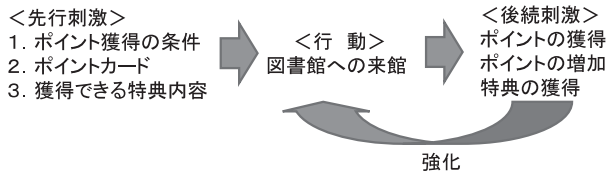


図5. 今回の介入のABC分析

【考 察】

図書館利用者数、貸出冊数を増加させる目的でポイントカードを導入した。その結果、昨年と同時期に比較して、図書館利用者数は有意に増加した。よって、今回の介入は利用者数を増加させるうえで有効に機能したものと考えられた。

行動した結果、環境からよい応答があるとその行動の生起頻度は増加する。逆に、悪い応答があるとその行動の生起頻度は減少する。行動が増加する場合の環境からの応答を強化刺激、減少する場合の応答を嫌悪刺激と呼ぶ。これは行動分析学における行動の法則である²⁾。適切な行動を増加、定着させるときには、その行動に対する強化刺激を増加させるように働きかける。今回用いた借用可能な図書数が

1冊増加するという特典は、多くの本を利用したい学生にとって強化刺激となったはずである。また、貸し出しを行っていない漫画本の借用は、漫画好きな学生にとって強化刺激となった可能性が高い。したがって、これらの強化刺激が有効に機能した結果、図書館への来館者数が増加したものと考えられた(図5)。本を書架に戻す行動に対してアプローチした先行研究では¹⁾、映画チケット、ハンバーガー、コピー機の使用、キャンディなどが強化刺激として準備され、介入期の2週間で213ドルが費やされた。今回、国家試験問題への挑戦において5問正解で約30円のお菓子がもらえるというルールが設定されていたが、その介入は前年度から行われていたものであった。つまり、今回の介入では特別な経費をかけることなく利用者数の増加が得られていた。この点は、介入を継続させるうえで大きなメリットと考えられた。

一方、貸出冊数には有意な変化は見られなかった。今回のポイントは、借用機会に対して与えられていた。つまり、同時に5冊を借用した場合も、1冊を借用した場合もポイントが同じであった。このため借用冊数の増加に対して強化刺激が十分に機能しなかった可能性がある。今後はこの点について改良を加えた介入が必要であろう。

【引用文献】

- 1) Meyers H, Nathan PE, Kopel SA: Effects of a Token Reinforcement System on Journal Reshelving. Journal of Applied Behavior Analysis10: 213-218, 1977.
- 2) 山崎裕司・山本淳一(編): リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ第2版. 三輪書店, 東京, 2012. pp14-40.